

ろくべん館だより Vol.46

『体験型宿泊施設を体験する』

毎日、仕事場で対応するのは旅人がほとんどである。旅の人たちが大鹿でどこに行き、何に興味をもち、どんな印象を抱くか、これまでいろいろな話を聞かせていただいた。中には大鹿を気に入って、繰り返し訪れるという人も多い。立場を変えて、もし自分が他の土地に住んでいたなら、大鹿村は何度でも訪れたいと思うに違いない。旅で出会う土地の中には、何度でも訪れたいと思わせ心惹かれる場所があるものだ。

学生時代にひとり旅をして以来、佐渡は何度も訪れる場所である。当時、東京から夜行列車に乗り直江津からフェリーで日本海を渡る長旅は、ずいぶん遠くまで来たという感慨もひとしおだった。海岸沿いに歩き続けても、誰にも出会わない。観光客はたいてい決まった所に集まるものらしい。昼食用にパンと牛乳を買いに入った小さな店は、二階で宿屋も営んでいるらしく、店の奥から出てきた老婆がひとり旅の身を案じてくれたのか、「今日はここに泊まっていかないか」と声をかけてくれた。今日は〇〇まで行くつもりだと、まだ歩いて一時間ほど先の地名を告げると、そこにはこの集落から嫁に行った者が民宿をやっているからと、名刺の裏に「このお客様、よろしくお願ひします。海望亭 老母」と書いて持たせてくれた。旅先で人の情が身に染みるのを知ったのも、この旅だった。

大鹿に住むようになって、時間とともにこの地に馴染んできたとはいっても、時にこの谷をいつもより狭く感じることもある。また、時にはその谷にかかる灰色の雲から抜け出したくなることもある。一年に一度は海のある土地を旅するのが恒例になって、佐渡も繰り返し訪れるようになった。

今年九月に泊まった佐渡南西部にある宿根木は、入り江の狭い土地に家々がくっついて建つ集落だ。古い町並みが良く保存されている。しかし、ここでも年々人口は減少し、空家がポツポツと増えてゆく。そういう民家を利用し、体験型宿泊施設として一棟まるごと借りられる家が三軒あった。その土地の古い家での生活を体験でき、そして希望すればそば打ち、たらい舟漕ぎ、竹細工、郷土料理などを地元の人に教えてもらいながら体験学習ができるというわけだ。

今回利用した施設は築一五〇年の民家を新田とよばれる高台に移築したもので、周囲には田畑がのどかに広がっていた。家の造りは外壁に囲われていて、外に向かって開かれているというより、外の世界を遮断し内側に開放されたスペースを持つ宿根木特有の造りだった。家の入口をまたぐと、中庭をコの字型に囲んで、母屋、風呂場、トイレが並んでいる。ここが数日間の借家である。

母屋に入ると土間のままの広い台所があって、そこは大鹿の古い家とも似ている。柱、

天井、板の間、建具、階段は漆塗りで、居間には囲炉裏がある。台所には食器、調理器具、冷蔵庫などが備えられていて、食材だけ持ち込めば自炊ができる。風呂は五右衛門風呂で、焚口には十分な薪が積まれていた。洗濯機まで置かれていて、洗濯物は中庭に干すことができる。これで大人一泊三〇〇〇円程の宿泊費というのはうれしい。

九月ともなると、佐渡の海で遊ぶ人はもういない。たまに散歩する人、釣りをする人を見かけるくらいだ。しかし暖流の対馬海流のおかげで水温は暖かいし、クラゲを気にすることもなく泳ぐに十分だった。佐渡のきれいな海を満喫し、大鹿では見ることのない遠い水平線を眺めたり、空いっぱいの夕焼けに見とれる。

豊かな自然だけでなく、佐渡はまた特有の文化をもつ土地である。古来、都から流罪となった文人や貴族の影響を受けた文化が受け継がれている。中でも流刑にあった世阿弥によってもたらされた「能」はよく知られ、多くの能舞台が今も残っている。運良くそのひとつで開かれた夜の能を観ることができた。こざっぱりとした茅葺屋根の舞台で地元の人たちの演じる能はなかなか上手で、大鹿の歌舞伎を思い起こさせた。謡の人々の中に中学生くらい女の子がひとり混じっていて、演じ終え退場するときに、長時間の正座でしびれた足を引きずりながら歩く後ろ姿がなんとも微笑ましく、つい応援したくなった。

一日たっぷり佐渡の島内を堪能し、夕方にはスーパーや無人販売で地元の新鮮な海産物と野菜を買って帰る。そして五右衛門風呂に薪をくべる。五右衛門風呂は、実にやわらかい良い湯であった。日常を離れ非日常を体験しに旅に出たはずだが、その土地の人の日常や生活感を味わえる宿にやはりホッと安らぐ。こんな宿ならまた来たい。感謝の気持ちを込めて帰る日には掃除をし、五右衛門風呂は特別念入りにゴシゴシと洗ってきたのであった。

ところで今回佐渡で経験したことは、大鹿を繰り返し訪れる人たちにも当てはまらないだろうか、ふと考えた。山麓の雄大な自然の中で時間を忘れ、ゆったりと一日を過ごす。そして山村に残る独特の文化や暮らしに触れる。地元の人と会話を交わす。今回見つけた佐渡の「隠れ家」のような、民家を利用した一棟貸しの施設があったら、大鹿が好きで繰り返し訪れる人たちは喜ぶのではないだろうかと思った。特に風呂や囲炉裏、薪ストーブなどの火を使う生活は、パチパチと燃える炎や煙の臭いに心が安らぐ。そんな暮らし方を一日でも二日でも経験し、また元気になって日常に帰ってゆく。我が家のように使える場所があったら、都会に住む人や時間に追われ忙しい生活をする現代人にとって、何よりの「隠れ家」になるように思うのだ。また帰ってきたい、そう思える魅力がまだまだ大鹿にはあるはずだ。